不定語疑問文の主題化

「「抄物コーパス」の構築とコーパスを応用した日本語史研究」2022年度第1回研究発表会

12月3日（土）於 博多駅前貸会議室　　北﨑勇帆（高知大学）

1. 問題の所在

- 不定語を用いる疑問文（以下、不定語疑問文）は一般的に、（1a） のようにして、話者にとって未知である不定項を提示して、その説明を聞き手に求めるものである。この「説明」を聞き手に要求せずに話し手自身が行おうとする場合に、不定語疑問文を引用節に埋め込んで主題化することで、（1b）のような表現（高橋1999「自問自答形式の疑問表現」、小林2001「自問自答表現」）を作ることがある。現代共通語では他に、（1c）のように、条件表現を構成要素とする接続詞化した形式を用いる場合や、（1d）のようにして語彙的に実現する場合などがある。

  （1）

  a. 「どうして院政期を中世に含めるんですか？」「この頃に古典文法らしさが崩壊し始めるからです。」

  b. どうして院政期を中世に含めるのかというと、この頃に古典文法らしさが崩壊し始めるからです。

  c. （どうして院政期を中世前期に含めるのか？）なぜなら、この頃に古典文法らしさが崩壊し始めるからです。

  d. （どうして院政期を中世前期に含めるのか？）その理由は、この頃に古典文法らしさが崩壊し始めるからです。

- この（1b,c）の「不定語疑問文の主題化」は抄物で頻繁に出会う表現である。下例 （2a-d）は現代語に即して理解しやすいが、これと類似する（2e）や、訓点資料に見られる（2f）は現代語と可換ではない。

  （2）

  a. 學而已下ノ二十扁ハ小目［モク］也。ナセニ學而ヲ以テ第一ノ扁ニ置ソト云ニ、人ハ學問ヲシテ舜何人ソ吾何人ソト云所ニ至ヘシ。（応永本論語抄・学而第一・27-8）

  b. 此以下は先王の天下を五服にわけさためられた事を云そ。なせにと云へは五服を定て其朝請入貢もちやうと定たそ。（史記抄・周本紀・131-10）

  c. 傳と云はをごつたぞ。なぜになれば、理運に師より傳來したと云ほどにぞ。（毛詩抄・巻1・5-2）

  d. 我子ノ伯魚カ死時ニ棺ハカリニテ葬テ槨［外の棺］ヲハ用イサリシナリ。其時我車〈ヲ〉売テ槨ヲ作ラス。其故ハ車ヲ売テ歩ニテアルクヘカラサル故也。（応永本論語抄・先進第十一・462-7）

  e. 何として知ぞなれば、其國の風土を譽［ホメ］つ、そしつゝして、歌を作て歌ふ程に、其を以て知ぞ。（毛詩抄・巻1・6-1）

    - ??どのようにして知るのかなら、

  f. 何の因縁を以てゾ、諸の行法を説ケども、去來有（る）こと無キとならば、一切の法は體において異なること無キに由ル故になり。（以何因縁説諸行法無有去來由一切法體無異故）（金光明最勝王経古点・巻4・74-9）

    - ??どんな因縁によって、…のかとなら、

- 本発表は、特に以下の2点に注目しつつ、こうした「不定語疑問文の主題化」の展開を探ることを主な目的とする。
  - 「なぜなら」型の接続詞の成立
  - 抄物における「〜なれば」型の成立

2. 用例概観

- 本発表で扱う構文を、以下の条件で分類する分けることができる。最も生産的であると見られる「理由の説明」（イカニ・ナゼニ系）を中心的な対象としつつ、適宜、他の種類の不定語疑問文も扱う。

- 条件節の構成の有無
  - する場合、
    - 発話動詞型：［疑問文］ト＋発話動詞（トイウニ、トイエバ、トイウタラバ、トイウト、）
    - トナリ型：［疑問文］ト＋ナリ（トナレバ、トナラバ）
    - ナリ型：［疑問文］ナリ（ナレバ、ナラバ）
  - しない場合、
    - 語彙的な主題化（その理由は、［理由］。）
  - この他、近世には命令形を用いる「なぜといえ」があるが（湯澤1936：121）、ここでは扱わない。
- 疑問文の文型は以下の2類に分けておく。
  a. ［Wh…］：なぜ〜か？
  b. ［…Wh］：〜はなぜか？

- 主な調査対象は以下の通り。
  - CHJ 奈良時代編〜江戸時代編
  - 中古訓点資料
  - 延慶本平家物語
  - 抄物：
    - 応永本論語抄：抄物大系翻刻に基づく北﨑作成テキスト
    - 蒙求聴塵・蒙求抄（書陵部蔵本）：住谷芳幸氏作成テキスト
    - 史記抄・毛詩抄：ジスク・マシュー氏作成テキスト
    - 大学抄、中庸抄、貞永式目抄、玉塵抄、四河入海、三体詩素隠抄（全て国会本）：次世代デジタルライブラリー提供のOCRテキスト
      - 正確でないデータであることを織り込んで、傾向の把握に使う。
      - Slackで共有します。
- 以下、時代・資料群ごとに例を概観する。

2.1 上代・中古（和文）

- 古代語の文相当句を承けるトナリについて述べる辻本（2017）によれば、疑問表現を受けて「〜かというと」のような意味を表す「とならば」の例が、上代に既に僅かながら見られるという。上代には発話動詞型・ナリ型は見出されない。

  （3）

  - 何を以（ち）てか知（る）とならば〈何乎以天可知止奈良方〉志愚に心善（から）ずして天下を治（むる）に足（り）ず。（続日本紀宣命・33詔［765］10-宣命0797_26033,2860, 辻本2017：13）
- 中古和文では、以下のうつほ物語の発話動詞型の例のみが見出される。仏の説法の場面で、明らかに訓読文的な例。

  （4）

  - 仏現はれてのたまはく、「…また、この日の本の衆生は、生々世々に人の身を受くべきものにあらず。その故はいかにといへば、前の世に淫欲の罪はかりなし。…」（うつほ物語・俊蔭・36-5）
- 「理由は」型は少ないものの、一定数見られる。中古和文はこの方法しか持たないと考える。以下、「理由は」型は時代を通じて出てくるので割愛する。

  （5）

  a. 督の君、さすがにあはれにて、……『しばし』と制しはべりしなり。その故は、西の方に住みはべりしより、時々忍びてまかり通ひて、時々見はべりしに、御けしきも、異御子どもよりも、こよなく思しおとされたりき。（落窪・20-落窪0986_00003,106810）

b. わが君、……となん思うたまふる。そのゆゑは、住吉の神を頼みはじめたてまつりて、この十八年になりはべりぬ。（源氏・明石・20-源氏1010_00013,78950）

2.2 中古訓点資料

- まず発話動詞型について。訓読文の場合、「者」字の訓として「トイフハ・トイハ」があり得（大坪1959）、「所以者何…（者）」を「（所以は）…トイハ」と訓む例がある。

（6）

a. 何（ぞ）甚深と名（づけむ）とて「イ、ル（と）イハムト」云（はく）二乗不知（と）いへり。若（し）初の解に依（りて）いはば、所以（は）〔者〕何［（いか）］に（と）いは（ば）、所得の解脱は三乗同（じ）なりと雖（も）、般若と法身との相性の智恵をば、彼が得未（る）所なり。（何名甚深。云二乗不知。若依初解。所以者何。所得解脱三乗雖同。般若･法身。相･性智慧。彼所未得。）（妙法蓮華経玄賛淳祐点（天暦頃）巻3［950頃］161-17）

b. 所以者何といは〔者〕、上の漢羅の一乗を信（ぜ）不［ぬ］義を釈す〔也〕。（所以者何者釈上羅漢不信一乗義也）（法華義疏長保4年点・方便品末［1002］441-7）

- ただし、訓読文の場合、この表現ではトナラバ型を取るのが基本的である。原漢文に「云」字がなく、本動詞の「イフ」を補いにくいためか？
  - このことを述べた先行論としては、築島（1963：448）の「「何者」等を「ナントナラバ」「ナントナレバ」と訓ずるのも、訓讀特有の語形であらう。古くは、「…ナラバ」「…ナレバ」の両例があつたやうである。」との指摘が早い。ほか、春日（1942：296-297）、大坪（1981：541）にもトナラバを含む例が挙がる。
- 以下、例を挙げる。訓読文において、「Wh…」の場合と「…Wh」の場合に偏りはない。

（7）

a. 何を以（ちて）知（ると）ならは〔之〕、尼延子等の如キを佛の弟子の供養（を）得（る）を見（る）か故に嫉妬の心を生（す）是の。（何以知之。如尼延子等見佛弟子得供養。故生嫉妬心。是…。SAT: T1646_.32.0323c02-04）（成実論天長点・巻15［828］108-13）

b. 何の因縁を以てゾ、諸の行法を説ケども、去來有（る）こと無キとならば、一切の法は體において異なること無キに由ル故になり。（以何因縁説諸行法無有去來由一切法體無異故）（金光明最勝王経古点・巻4［830頃］74-9）

c. 何（を）以（ての）故（に）とナラバ、知相无きガ故に。（何以故。無知相故。SAT: T1569_.30.0172a17）（東急・百論天安点・13-6-17・大坪1981：541）

d. 何（を）以（て）ぞ足を捉ると（な）らば、天竺の法は、足を捉るを以て第一の恭敬供養と爲《す》る（を）以てなり。（何以捉足、天竺法、以捉足為第一恭敬供養。）（石山寺本大智度論・巻13・24-20［858］851-6）

e. 何が以にとならは《ユヱニトナラバ》即（ち）空を執するは〔者〕其の空の辺に滞（り）ぬ。（何以即執空者滞其空）（東大寺図書館蔵百法顕幽抄・1535［900頃］111-17）

- ただし、原漢文に「所以者何」などとある場合、付訓のない例の方が圧倒的に多い。単に「ゆゑはいかん」として、その後に答を述べたものか。

（8）

a. 所以者何　此方便をもちて一切作意の修（する）所の諸行速く成満するに由（るが）故。（所以者何。由此方便一切作意所修諸行速成滿故。SAT: T1606_.31.0749b18-19）（聖語蔵本大乗阿毘達磨雑集論［800頃（828以前）］）

b. 所以者何、一切の法は、自性空なり。（所以者何一切法自性空）（石山寺本大智度論・巻61・18-15［858］628-10）

c. ちち、はるかにこれをみて、つかひにかたらひていはく、「…また、くみしかたることなかれ。」ゆへはいかん。ちち、そのこ、志意、下劣なることを知れり。（父遙見之。而語使言。……莫復與語。所以者何。父知其子志意下劣。SAT: T0262_.09.0016c29-0017a03）（妙一記念館本仮名書法華経・巻2・310-1）

2.3 中世前期和漢混淆文

- トナリ型は、中世前期和漢混淆文には以下のように現れる。ただし、例は多くはない。

（9）

a. 汝ヂ、法花ヲ棄テヽ最勝ヲ可持シ。其ノ故何（いかに）トナレバ、最勝ハ甚深ナル事余経ニ勝レ給ヘルニ依テ、最勝王経トハ云也（今昔物語集・13-40・30-今昔1100_13040,1790）

b. われ今身のためにむすべり。人のために作らず。ゆゑいかんとなれば、今の世のならひ、この身のありさま、ともなふべき人もなく、頼むべき奴もなし。（方丈記・30-方丈1212_00012,4330）

c. 天人ノ果報ヲ得テ、虚空ニ飛行スル身ニテ候ガ、只今コヽヲ罷リ過ギ候ガ、御琵琶ノ撥音ニツキマヒラセテ参リテ候ナリ。イカムトナレバ、テイビムニ琵琶ノ三曲ヲ授シ時、一ノ秘曲ヲノコセリ。（延慶本平家物語・第二本・314-14、唐の廉承武の発話）

- 発話動詞型は、（うつほの例を除けば）鎌倉期に入ってから安定して見られ始める。原漢文の制約を受けない和漢混淆文で、引用句であることを明示する方法として好まれたものか？

（9）

a. 兵衛佐宣ケルハ、「…来八月十五日以前ハイカニモ思立ジト思也。其ハイカニトイフニ、今明謀反ヲ発シテ合戦ヲスルナラバ、諸国ニ被祝（いははれ）マシマス、八幡大菩薩ノ御放生会ノ為ニ、定テ違乱トナリナムズ。」（延慶本平家物語第二末・493-14）

b. 抑平家の安芸の厳島を信じ始められける事はいかにといふに、鳥羽院の御宇に、清盛公いまだ安芸守たりし時、安芸国をもって、高野の大塔を修理せよとて、渡辺の遠藤六郎頼方を雑掌に付けられ、六年に修理終んぬ。（高野本平家物語・大塔建立・30-平家1250_03005,3490）

c. いかに少将、それは貞能がとがにもあらず。其故は如何にといふに、此太刀は大臣葬の時用ゐる無文の太刀なり。（高野本平家物語・無文・30-平家1250_03012,10630）

d. 抑源三位入道、年ごろ日比もあればこそありけめ、今年いかなる心にて、謀叛をばおこしけるぞといふに、平家の次男、前右大将宗盛卿、すまじき事をし給へり。（高野本平家・競・30-平家1250_04006,4790）

2.4 中世後期

2.4.1 抄物

- トナリ型は引き続き用いられるが、例は多くなく、後期抄物には特に現れにくい。次項のキリシタン資料での現れ方と併せて、当期には既に活発でなかったものと見る。

（11）

a. 有求足開得足肹者不得繫者足肹不出開出其卜病也 足開而死者內高而外下也
言ハ凡足開ハ、百事ニ吉ナルニ、
ナゼニト〈ルニ〉【レ】病〈ヲ〉カキツテ、足開而死ソトナレハ、内高而外下ナレハソ。（史記抄・亀作列伝・5-263-7）

b. サテ、法ヲハ、誰カスルソト、ナレハ、「松—（杉）」ノ、風声ノミ、説法ノ音ソ、（四河入海・巻16・12-R3）

- 発話動詞型も、中世前期に引き続き見られる。

（12）

a. ○知者動——知者ハナセニ水ヲ樂ムソト云ニ、常ニ我智恵ヲ憎（ママ）長セントテ、心ヲ動瑤スル冂、水ノ流動スルカ如也。
○仁者静——仁者〈ハ〉ナセニ山〈ヲ〉樂
ソト云〈ニ〉仁者〈ハ〉其心ノ閑ナル冂、山ノ不動カ如也。（応永本論語抄・雍也第六・292-7）

cf. ○知者動、知者ハナゼニ樂水ソト云ニ、常ニ我知恵ヲ増長セントテ、心ヲ動スルコト、水ノ流動スルカ如キ故也。
　○仁者静、仁者ハナセニ楽山リ（ソ歟）
ト云ニ、仁者ハ其心ノ静ナルコト、山ノ動セサルカ如キ故也（論語聴塵・巻3・43R10）

b. 漢家四百年ノ創業ハ、意豁如也［イクワツシヨヤ］ノ四字ニアルソトヲセラレタヲハシ、カウ聽ナシタカト、推量シタソ。ナセニト云ヘハ、此四字ニカキリテ、音ニ讀テヲキコトハ、不審ソ。（史記抄・高祖本紀・2-82-12）

c. ナンノハライト云ニ祓ヲカクソ（玉塵抄・巻14・153L8）

- 当期から、ナリ型の例が見え始める。湯澤（1929）はこれを「疑問の文句を承けてこれを解説するに用いる」接続詞のナレバと見たが、鈴木（1972：391-393）、坂詰（1974）は以下のように扱い、青木（2022）は「直接引用または間接引用の「文相当」句を「文相当」形式のまま示し、「なれば／なれども／じゃほどに」などの「コピュラ＋接続助詞」形式を用いて後続文に繋げる、様々な構文パターン」の中に位置付ける。
  - 抄物には「…ゾ」で終る疑問文の後に、「ナレバ」で始まる文が続いていく形がある。この場合「…ゾ」と「ナレバ」との間に朱の句読点の施されていないものがあって、「…ゾ」のところで一たん切れるのかどうかが必ずしも明らかでない。つまり現代語で言えば、
    - （a）…か？そのわけは…
    - （b）…かというと…

    のどちらであったかがはっきりしないのである。

    当時としても（a）のような意味合いの場合と（b）のような続き具合の場合とがあったと解すべきではないかと思われる。（鈴木1972）
  - 抄物には、疑問詞と「ゾ」が呼応し、さらにその後に「ナレバ」を続けて理由を表わす言い方が頻出するが、その場合「…ゾ」と「ナレバ」を一連のものとして考えるか、あるいは「…ゾ」のところで一旦中止して、「ナレバ」から起すかどうかが、実際に本文などには朱の句読点が施されていたり、いなかったりしていることが多いために定かでない。（坂詰1974：191）

  （13）

  a. 其ヲハ何トシテ注スソナレハ、論-談決-択擇シテ注スニ依テ論ト云也。（応永本論語抄・学而第一・9-2）
  b. 雎鳩はみさごの事ぞ。水鳥では無［ナイ］ぞ。なぜになれば、かけつめが無ほどにぞ。（毛詩抄・巻1・27-7）
  c. 三人と云は誰ぞなれば、夏桀一人と唐虞の子孫とぞ。（毛詩抄・巻20・451-5）
  d. 此堂ハ、ナニタル処ニ、アルソ、ナレハ、谷ノ窈窕ト深キ処ニ、高林ノ、合シテ、扶疎タル処ニ、在ソ、（四河入海・巻12・23R1）

2.4.2 キリシタン資料・狂言

- 前項にも見たように、トナリ型は口語では活発ではない。天草版平家物語では序文にしか現れず、日葡辞書では「文書語」注記が打たれ、発話動詞型に置き換えられている。

  （14）

  a. かるが故に言葉のてにはのみに有らず，この国の風俗として，一人に数多の名，官位の称え有る事をも避くべしとなり：故如何となれば〈yuyeicantonareba〉，これ物の理を乱すに因って，他国の言葉を学ばんとする初心の人の為には大きなる妨げなり．（天草版平家物語・序・40-天平1592_00002,7300）
  b. Ican. イカン（如何）どんな具合にして，または，どうして．文書語． ¶ Icanto nareba. （如何となれば）すなわち， Najenito yuni.（何故にと言ふに）このことの意味は…である．（邦訳日葡辞書・322L）

     cf. Ican. De que maneira, ou como? S. ¶ Ican to nareba. i, Nazenito yŭni. A causa dißo be.（パリ版127r: gallica）
     - 文書語注記そのものは Ican に対するものであるが、id est 注記による言い換えが「なぜとなれば」になっていないことに注意。中野（2019）によれば、「被注記語 id est 注記語」の関係性において、「被注記語：注記語」は「難：易」の関係にある。
  c. Sonoyuyeua, vareraga Proximo ua mina Deus no von vtçuxi ni tçucuri tamayeba nari.（どちりなきりしたん・1592天草学林刊ローマ字本）
     其故は我らがほろしも皆でうすの御うちしに作りたまへば也（未詳国字本）

     Yuyeicantonareba fitoua mina Deusno von vçuxini tçucuri tamayebanari.（1600長崎学林刊ローマ字本）

     ゆへいかんとなれば人はみなDEUSの御うちしにつくり玉へばなり（1600長崎学林刊国字本）（校本・139-3）
  d. 故に諸々の御恩の礎へといふは是也、ゆへ如何にとなれば、諸の御恩をうけ奉るべき（ぎやどぺかどる・上10オ7）

- 発話動詞型が一般的。ただし、狂言には少なく候体の曲にしか出ないなど、「自問自答」そのものが文体的な制約を受ける。

（15）

a. したをこの人数に入れられた事は何とした事ぞと言うに〈nanto xita coto zoto yǔni〉，三位入道宮を勧められた事を平家は未だ知られなんだに因ってで御座った．（天草版平家物語・巻2-2・40-天平1592_02002,3500）

cf. 然ヲ、此ノ人数ニ入ラルヽ冂ハイカント云ニ、三位入道、宮ヲ進〈メ〉マイラセタリト云冂ヲ、平［ヘイ］家未〈リ〉【レ】知ケルニ依テナリ、三位入道是ヲ聞ヲ急キ、宮〈へ〉消息ヲコソ進〈セ〉ケレ、（斯道本平家物語・巻4-33句・249-5）

b. かの獣の我に教訓を成いた：それを何ぞと言うに〈nanzoto yǔni〉，汝向後御身の様に大事に臨うで見放さうずる者と知音すなと．（エソポのハブラス471・40-天伊1593_00033,2430）

c. 「かやうに候者は、周の武王に仕へ申官人にて**候**、誠に此君賢王にてましますにより、しよこう民百性に至るまで、此君をあがめたてまつる、それをいかにと云ふに、殷の紂王の御まつりごと散れ、悪ぎやくぶたうを巧み給ひ、諸侯国土のたみ百性の訴へ、憂申事をきこしめしいれられず候程に、萬民の悩是にすぎず候、（虎明本・武王・40-虎明1642_08002,780）

- ナリ型は、大文典の以下の記述に「なぜになれば」が見える程度である。

（16）

- AGVETE （上げて）の形に就いて，又接続法を用ゐる或言ひ方に就いて
○第二は，ある事の理由，又は，起源を調べたり，質問したり， また応答したりする場合の言ひ方である。即ち，その原因を尋ねれば，誰であったか，或いは誰であるかを私に尋ねれば等といふ場合である。Coreuo tadaxite miruni. （これを糺して見るに。）mireba （見れば）と同意。Sono dŏriuo najenito yǔni （その道理をなぜにと言ふに），又は，
Najeni nareba（なぜになれば）。Fongocuuo vcagŏni, Europatoyŭ. （本国をうかがふに，エウロパと言ふ。）Sore icanto nareba. （それ如何となれば。）Sono xenzouo tadzunureba nanigaxitoyu. （その先祖をたづぬれば某と言ふ。）（ロドリゲス大文典・p.73）

2.5 近世以降

- 以降の話は簡単に。まず、発話動詞型は引き続き用いられ、現代語に至る。

（17）

a. 御当地は芋所か。一生の見始め大坂で見世物にいたしたら、銭銀の掴み取り第一お家の吉相。なぜと申すに今日は殿のお成り、旦那の御出世、追つ付け山の芋から鰻におなりなされう（心中宵庚申・51-近松1722_21001,25740）

b. それが又私と断せる為に自分の手へ入る気か乃至やあ双方へ恩をかけて義理づくで断せる気かといふんだがまあどつちかといふとお前を傘の雪としたいのが山〻のやうに思はれるね（春色連理の梅・53-人情1858_07012,20900）

- ナリ型は、後期抄物の段階で既に不定語のタイプが「なぜに」に偏っており、かつ「〜はなぜに」のような主題化が行われない例が大半を占める。これを基盤として、近世後期以降に口語に「なぜならば」（＜なぜなれば、小林1996）型の接続詞が定着したものと見る。

（18）

a. ちやうちんに女郎をかく事、火にたゝるずいさうなり。それをいかにと云に、女郎ハやく物じや。かさねてハ幽霊をかけとおほせられた。なぜになれバ、きゆる物じやといふ。（軽口ひやう金房［元禄末］266）

b. 香　わつちもふつ／＼女郎買［けへ］はやめやうと思ひやす　なぜなれば一昨日も羽左衛門をかこ付ヶかの所へめへりやした所が…わつちがふらちをしちやア番頭のまへヱさつはり顔か向ケられやせんからもう／＼思ひきりやすのさ（通人三国師［1781刊］洒落本大成11-188上2）

c. しやれ本を作りなさる人さんをひととをりの客衆とおもふておると大違ひじやな　なぜならしやれ本つくり人さんがちよつといち度おいでなんすと坐敷中は勿論台所勝手部屋裏口には井戸と湯殿と別火のところそれから…穴の穴までも見透してしまふじやがな（南駅夜光珠［1807刊］大成24-287上4）

d. 夫れにつけても管右衛門が酒はのみ口上戸とつけやした。なぜなら酒を出すと跡できつとひねらずにはおかねへツ。（人間万事虚誕計・後編［1813刊］叢書江戸文庫19-402-3）

e. じやまにはならねへのだ。なぜならば今すぐぢやァねへ、此次の世に（七偏人・三編中・湯澤1954：347）

- なお、口語資料では時代的な隔絶があるが、国字解には抄物を引き継ぐ形で一定数見られるようである。
  - 参考：次世代デジタルライブラリー「なぜなれば」「なぜならば」
- なお、主題化のない例が「なぜに」に偏るのは、他の不定語疑問文の回答が語彙的な項目によって満たされるのに対して、理由を問う疑問文の場合は文レベルの内容を承けることによるか（一文にまとめようとすると複雑になるため、一旦切って前の文を承ける形を取りやすい？）。理由を問う疑問文が他の不定語疑問文と異なる性質を持つことについてはRizzi（2001）、金水（2012）なども参照。

（19）

a. あなたが生まれたのはどこですか？　埼玉県です。

b. 今日の会議は何時からですか？　1時半です。

c. 次の発表者は誰ですか？　ジスクさんです。

d. なぜこういう発表をしようと思ったんですか？　前から気になっていたからです。／??興味です。

2.6 その他（補）

発話動詞型について、以下のような例があることに触れておく。

- 疑問文＋思考動詞の条件形。（20a,b）のように、不定疑問文による思惟の後にその思惟の結果が提示されると、結果的には不定項の説明になる。が、これは、（20c）と同様、単に、思惟の後に起こった結果が示されているだけに過ぎないものと見たほうがよいか。

（20）

a. 帝王の御次第は申さでもありぬべけれど、入道殿下の御栄花もなにによりひらけたまふぞと思へば、まづ帝・后の御有様を申すなり。（大鏡・天・20-大鏡1100_01015,420）

b. 鬼に神取られたるやうにて共に行く程に、家に行き着きぬ。いづこぞと思へば、摂津前司保昌といふ人なりけり。（宇治拾遺物語・巻2-10・30-宇治1220_02010,6450）

c. 今さらに見棄ててうつろひたまふや、いづちならむと思へば、いとこそあはれなれ」とて泣きたまふ。（源氏・少女・20-源氏1010_00021,138760）

以下のような、疑問文＋「見る」の条件形も、本発表の問題とする構文に機能が似る。ただし、「見る」がその後に引き継がれなかった理由を想定し難いので、直接的な関係はないものと見ておく（三宅2017の「発見構文」に近い？）。

（21）

a. 見出ではてぬるに、ためらひて、寄りて、なにごとぞと見れば、君をのみ頼むたびなる心にはゆくすゑ遠く思ほゆるかなとぞある。（蜻蛉日記・上・20-蜻蛉0974_00001,21680）

b. 誰ならむと見れば、御前どもの中に、例見ゆる人などあり。（蜻蛉日記・下・20-蜻蛉0974_00010,63820）

c. 御障子より投げ入れらるるものを何ぞと見れば、わが局に置きたる二藍の唐衣被きたるもの投げ入れて、人のゐるを見れば、藤三位殿のかくと聞きて参りたまへるなりけり。（讃岐典侍日記・上・20-讃岐1110_00001,107780）

3. 抄物のトイヘバ・トナラバ・ゾナラバ

- 2節の内容のざっくりしたまとめ

		発話動詞型	トナリ型	ナリ型	（理由ハ）
中古和文		△	×	×	○
中古訓読文		△	○	×	○
中世前期和漢混淆文		○	○	×	○
中世後期	抄物	○	○	○	○
	キリシタン	○	△	△	○
	狂言	○	×	×	○
近世以降（口語）		○	×	○	○

- すなわち、抄物においては3（+1）種の文型が混在しているということになる。以下、これらの間の異なりについて考える。

	トナリ型		発話動詞型		ナリ型	
	Wh…	…Wh	Wh…	…Wh	Wh…	…Wh
応永本論語抄			14	5	2	
史記抄	12	3	42	66	20	5
蒙求抄			7	5	9	3
中華若木詩抄			4		3	2
毛詩抄	(3)	(1)	54	30	193	50
四河入海	3	4	376	412	50	187
三体詩素隠抄	4	1	20	78	12	20
玉塵抄			15	2	1	8
論語聴塵		1	15	3	1	
蒙求聴塵			7		2	1

3.1 トナリ型の衰退

- トナリ型は例が少ない。ただし、以下の例のように発話動詞型と同一の文脈にも現れるので、必ずしも「文語的」ではないのかもしれない。例えば毛詩抄には4例見えるが、全て訓読部の例なので、後期抄物で用いられにくいとは言えそう。

（22）

a. …左三則右必一、左四則右亦四ナリ。掛一策ニ通シテ、左右ノ二扐ヲ合スレハ、不五則九ナリ。ナセニ、カウアルソト云ヘハ、五十ノ物ヲ、一去レハ、四十九ナリ。其四十九ヲ、…。（史記抄・日者列伝・5-173-15）

b. …左二ナレハ、右必一ナリ。ナセニカウアルソトナレハ、四十四策カ、四十策カテアル物ヲ、其一ヲ掛一ニ取レハ、四十三カ、三十九策カナルヲ、…七テアルヘキソ。（史記抄・日者列伝・5-174-12）

- 素材のトナリそのものも口語的でなくなる。以下の例が分かりやすく、講義の場においても、トナリがカナ抄に少なく、和書の注釈書に偏って使われる旨の指摘がある（山本2019，2021）。

（23）

- 山王大師、隣ヲ垂玉ヘ、三千ノ大衆、力ヲ合セヨトナリ、サレトモ、年来日比ノ振舞、神慮ヲ省キ、違【二】人〈ノ〉望〈ニ〉【一】ケレハ、祈レトモ叶ハス、語合〈ヘ〉トモ、靡カス、大衆是ヲ見テ、真ニサコソトハ、哀〈ミ〉ケレ共、（斯道本平家物語・巻7-67句・448-10）
- 一門の公卿同心して願書を書いて，比叡の山へ送って，三千の衆徒に力を合わせいと頼まれたれども〈to tanomaretaredomo〉，年来日頃の振る舞いがそで無かったに因って，祈れども，適わず，語らえども，靡かず：（天草版平家物語・巻3-5・40-天平1592_03005,13720）

3.2 手控との比較から見る発話動詞型・ナリ型

- ナリ型・発話動詞型の共時的な機能の差異はよく分からない。
  - 使用の割合は抄によってまちまちだが、全体としてはナリ型が漸増するように見える。抄中の出現量は原典の影響を大きく受ける？（例えば、原典の韻府群玉が問答体を取らないために、玉塵は分量の割に例数が少ないなど。それとも講述者・抄者の好み？）
  - 構文上の差異として、Y/N疑問文を承ける例はそもそも少ないが（そもそも—カ疑問文自体も少ない。竹村・金水2014）、これを承けるのは発話動詞型のみで、「～カナレバ」の例はない。このことが何を意味するのかはよく分からない。

（24）

a. 是ハ子夏カ云義ヲ本トスヘキカ、子張カ義ヲ本トスヘキ歟ト云ニ、此包氏カ注尤ヨシ。（応永本論語抄・子張第十九・691-11）

b. 一云官——言ハ、上ノ数句ニ、所【レ】云ノ、如キ、人ハ、官ニハ、ナルマイカト、云ヘハ、イヤ、サハ、ナイソ（四河入海・巻25・17L3）

- 手控にはナリ型・トナリ型がどちらも現れにくく、発話動詞型が多い。とすると、ナリ型は相対的に見て口語的か。試みに、毛詩抄と毛詩聴塵（手控、清家文庫「詩経抄」）の比較を行う。
  - 聴塵は巻1-4に口語現象が混入することの指摘があるので（田中2008）、抄の巻1と、同数程度の例を拾えた巻11-15を対象に、聴塵との対照を行った。

（25）巻1の例

a. （発話動詞→発話動詞）
正雅ニハ、美ルト云事ヲハ、クワヌト云カ、
ナセニ、此レニ美【二】召伯【一】トハ云タソト云ニ、二南ハ文王ノ風ナルカ、文王ヲ美トハ云ハス、（毛詩聴塵・巻1・40R-3）
正雅には美［ホムル］とはせぬが、是には
なぜに美ぞと云に、二南は文王の風ぞ。（毛詩抄・巻1・88-5）

b. （発話動詞→ナリ）
其糸ハ五色ナルヲ、
ナセニ、玄ノ字ハカリ、付タルソト云ニ、玄ハ、天ノ色也、天ノ色ノ、貴ヲ取出シテ云也、（毛詩聴塵・巻1・18R-10）
したを、
なぜにこゝに玄と云ぞなれば、天の色をたつとうでとり出たぞ。（毛詩抄・巻1・36-9）

c. （ナリ→ナリ）

ナセニ、輾字ハカリヲ、注シタソナレハ、一番ノ字ニテ、身モチカネタト人カ知ルヘキ程ニ、一字ヲ注シテ、三字ヲ知ラスル也、（毛詩聴塵・巻1・16R-12）

なぜに輾の字ばかりを注したぞなれば、一番の字で、身をもちかねたと人が知りかねうずほどに、一字を注して、三字を知［シラ］するぞ。（毛詩抄・巻1・31-3）

d. （直接的な対応なし）
麟趾ヲ、
末ニヲク事ハ、關雎ノ応アレハ也、（毛詩聴塵・巻1・30L-14）

なぜに此篇を終にをくぞなれば、關雎のうてばひゞくやうに作たぞ。（毛詩抄・巻1・68-5）

（26）巻11-15の例

a. （発話動詞→発話動詞）

ナニトテ、此ノ大師ハ顕盛ナルソトイヘハ、三公ノ位ニヰテ、民カ一同ニ此人ヲ仰キミルユヘ也、（毛詩聴塵・巻12・359L-11）

なぜに明なぞと云へば、三公の位にいたに依てぞ。（毛詩抄・巻12・52-14）

b. （発話動詞→ナリ）
此禍ハ、
トコヘ、ユキヨランソト云ニ、ヲチツク処ハ、国家滅亡ノ乱ニ、帰スヘシト云心也、（毛詩聴塵・巻13・418L-12）
をちつき処は
どこぞなれば、別の事は有まい。（毛詩抄・巻13・171-8）

c. （対応なし）
可憐シ人トハ、貧窮孤独ノ人ヲ云。（毛詩聴塵・巻11・338R-16）
憐［アワレム］べき人とは
なんぞなれば、貧窮孤独の人を云ぞ。（毛詩抄・巻11・5-15）

		聴塵対応あり		対応なし
		発話動詞	Wh…ゾナレバ	
抄・巻1	発話動詞	4	0	12
	Wh…ゾナレバ	5	4	19
	…Whナレバ	0	0	3
抄・巻11-15	発話動詞	5	0	5
	Wh…ゾナレバ	2	0	22
	…Whナレバ	2	0	7

- すなわち、
  - 聴塵にはナリ型は現れにくく、発話動詞型が多く現れ、抄にはナリ型と発話動詞型が併存する。
  - 不定語疑問文の主題化は、抄で独自に追加される箇所が7割以上（巻1は72.3%、巻11-15は79.1%）。
  - 対応箇所がある場合、抄の発話動詞型（トイエバ）は、聴塵の発話動詞型（トイウニ）を引き継ぐ例が多い。
  - 対応箇所がある場合、抄のナリ型は、巻11-15においては、発話動詞型を置き換える例しかない。
- ということで、少なくとも毛詩抄においては、ナリ型が発話動詞型に比して口頭語的な現象と見てよい。
  - 聴塵では事態を淡白に並べて、文間の論理関係を明示しないところを、抄では積極的に繋ぐ。
  - 巻1の場合にはその傾向が弱く、聴塵にもゾナレバが現れるので、聴塵が先行抄の『毛詩国風篇聞書』を利用したという成立過程の問題（田中2007，2008）が関わるものと見る。
    - 巻11-15には43例であるのに対し、巻1だけで49例あるという、この例数の違い自体も成立過程の異なりによるかもしれない。

（27）

a. ナセニ・輾字バカリヲ・注シタソナレハ・一番ノ字ニテ・身モチカネタト・人カ知リカネウスホトニ・一字ヲ注シテ・三字ヲ知ラスル也（毛詩国風篇聞書・12ウ8・25cの箇所）

b. 其糸ハ五色ナルヲナセニ玄ノ字バカリツケタルソト云ニ玄ハ天ノ色也 天ノ色ヲ貴テ云ヘル也 実ハ五色ナルヘキ也（毛詩国風篇聞書・14ウ6・25bの箇所）

3.3 ナリ型における「ナゼニ…ナレバ」と「ナゼニナレバ」

- ところで、同じナリ型の中で、疑問文の述語が動詞・形容詞になるか（ナゼニ…ゾ）、不定語になるか（…ハナゼニ）という観点から見たとき、応永本論語抄には、動詞・形容詞述語の場合には「Wh…ナレバ」「Wh…発話動詞」の両方があるが、不定語を述部とする場合にはナリ型がなく、発話動詞型の「…Wh発話動詞」の例しかない。また、後期抄物ではナリ型が優勢になるとともに、「…Whナレバ」の例も増えていく。
  - 一方、訓点資料のトナリ型では「Wh…」と「…Wh」は偏りなく現れ（例えば、最勝王経古点では13:15）、中世の軍記でも同様（高野本平家では2:5）である。
- このこと（主に応永本論語抄に「…Whナレバ」がないこと）の解釈は以下の2通り。当期には「…ハイカニ」型の疑問文があるため1の解釈も成り立つが、大木（1969）や矢毛（1999）の示す、中世前期の「文相当句を承けるナレバ・ナレドモ」の前接句の偏りは、2を支持するように思う。
  1. 数が少なく、たまたま資料に現れていないだけ。
  2. 「Wh…ナレバ」が先行し、「…Whナレバ」が後発的である。
  - 本発表では用例数の偏りを重視し、「Wh…ナレバ」と「…Whナレバ」の成立が同時でないものと見て、抄物のナリ型が、単にそれまでに存在した方法を引き継いだわけではないことを示すものと考えておく。すなわち、清水（1995など）が採る、トナレバのトが脱落したというような見方はしない。
- 北﨑（2022）では、中世前期の「文相当句を承けるナレバ・ナレドモ」が、既存の従属節では埋め込むことのできない節の関係付けの機能を補うものと位置付けた。
  - トナリ型・発話動詞型は引用構文の一環であり、文字通りには、「（聞き手が）「なぜ？」といえば、答えは（話し手が）「…である」」という擬似的なターンテイキングが行われ、それが定型化したものと考えられる。

- 一方のナリ型は、あくまでも文を承けるだけでターンテイキングが行われるわけではなく、動詞・形容詞述語文を承けるナレバの延長上にあると考えると、「Wh…ナレバ」が先行するものと見ることについて、一応の説明がつくか。
- その後、同じ不定語疑問文である「…Wh」疑問文にもナリ型が波及したものと考える。

（28）

- 童は見忘れたれども、僧都は争で忘るべきなれば、「是こそそよ」といひもあへず、手にもてる物を投げ捨てて、いさごの上に倒れふす。（高野本平家物語・有王・30-平家1250_03008,13640）
  童は見忘れたれども，俊寛は
  何故に忘れうぞなれば〈vaĺureôzo nareba〉，これこそそよと言いも敢えず，手に持った物を投げ捨てて，砂子の上に倒れ伏された．（天草版平家物語・巻1-12・40-天平1592_01012,13260）

3.3.1 ナリ型と「文相当句の名詞化」（補）

- ナリ型に関して、青木（2022）の「ナリの前接部が引用句に相当する」という解釈は首肯されるが、ナレバ・ナレドモの前接部が、鎌倉時代には推量文・疑問文に、室町時代には疑問文に偏ることをうまく説明できない。というのも、小田（2022）は「引用されたことばが格助詞・係助詞・副助詞等を伴って、または述語となって、文の構成要素として収まると、名詞的な振る舞いを強いられる」（藤田2000）ものを「引用実詞」として示すが、これには特段の文タイプの偏りがないため。

  （29）

  a. ［催馬楽ヲ］いとなつかしくうたひ給ふ。「親避くるつま」［トイウ箇所］は、…言ひ知らずおもしろく聞こゆ。（源・常夏）

  b. 何によりさして教へしほどなりや「惑ふ」は、（＝アナタガ「惑ふ」トイウノハ）いづち行かまほしきぞ（敦忠集）<「…惑ひぬるかな」トアル歌ヘノ返歌>

  c. 少将、「…。よにふとは忘れじ」とのたまへば、帯刀、「『ふと』ぞ、あぢきなき文字ななる」と申せば（落窪、以上、小田2022）

- 以下、類例を挙げる。

  （30）

  a. …と思し返せど、「思ふもものを」なり。（源氏・葵・20-源氏1010_00009,70050）

  b. 餞に、「菊の花のうつろひたる」を題にて、別れの歌よませたまへる、（大鏡・地・20-大鏡1100_02002,4010）

  c. 「かうかうのことのはべれば、内に遅参」のよしを申させたまひければ、（大鏡・地・20-大鏡1100_02001,77230）

  d. 夜もはや昼になれば、「まことに、また何とかはせむ」にて、帰しぬ。（とはずがたり・巻2・30-とは1306_02005,16250）

- ナリ自体は名詞を承けることができるので、（30a,d）のように名詞化された文相当句を承けることができる。その機能を前提としつつ、ナレバ・ナレドモにおいてはそれが特に、中心的な従属節が持たない機能の担保に用いられたために、それを引き継いだ抄物のナリ型も、疑問文に偏るものと考える。

4. まとめ

- 本発表では「不定語疑問文の主題化」について、以下のことを示した。
- まず、その歴史について、
  1. 「不定語疑問文の主題化」によって、不定項を説明する構文は、本来は日本語には存在せず、漢文訓読によって生まれた構文と考えられる。
  2. 当初はト＋ナリを素材とするトナリ型（Wh疑問文＋ト＋ナリの条件形）が用いられ、［2.1, 2.2］
  3. 中世に入ると発話動詞を用いる発話動詞型（Wh疑問文＋ト＋発話動詞条件形）が用いられるようになる。［2.3］
     - 「原文に「云」字のない漢文を訓読する」という制約から脱して、引用であることの明示化が行えるようになったことによる？

4. 中世後期には、ナリの用法拡張と「文相当句を承けるナレバ」の存在を前提として、ナリ型（Wh疑問文＋ナリの条件形）が現れる。［2.4］
5. このナリ型のうち、理由を問う「なぜ」のタイプは、理由を問う疑問文の特性により、主題を「〜は」として明示しない例が多く、結果として「なぜ（に）ならば／なれば」の形での接続詞化を招く。［2.5］

- 特に抄物における当該構文について、
  1. トナリ型は前期抄物ではわずかに用いられるものの、トナリそのものの衰退に伴って見られなくなる。［3.1］
  2. 発話動詞型とナリ型は併用される。ただし、毛詩聴塵と毛詩抄とを比較すると、抄で独自に発話動詞型・ナリ型を追加する例が多く、また、「手控の発話動詞型をナリ型に置き換える」例はあってもその逆はない。このことは、ナリ型が発話動詞型に比して口頭語的であること、また、この構文が抄物の文体形成において一つの重要な位置を占めることを意味する。［3.2］
  3. 特に抄物のナリ型について、「Wh…ナレバ」の成立が早く、「…Whナレバ」はやや遅れることが観察される。これは、ナリ型がトナリ型・発話動詞型を直接引き継いだのではなく、「文相当句を承けるナレバ」の発達の延長線上にあることを示すものである。［3.3］
- 今回やり残したこと、今後考えたいこと（メモ程度に）
  - 近世以降のナリ型について、
    - 「Wh…」型が用いられなくなり、「…Wh」型がナゼニナレバに限定されていく要因
    - 近世前期の典型的な口語資料における「なぜなら（ば）／なれ（ば）」の不在と、近世後期以降の口語化（どのレベルの口語とみなすかも含めて）についての処理
  - 今回扱っていないパターンとラベル付け
    - 「ナゼニ…ゾ。…ホドニゾ。」のような2文のパターンを扱えていない（個人的な興味としては、複数の事態を一文中で関連付けることについても考えたい）。ナゼニだけに絞っても十分な例数が採れそうなので、通常の不定語疑問文との関連付けも含めて考える？
    - 主題の明示の有無とWhの種類について、ちゃんとした数値を出す
      - 今回手薄になってしまった前期抄物の調査も含めて
      - 国立国会図書館のOCR関連事業で、古典籍OCRが公開予定とのこと（URL）。国会図書館以外の所蔵の抄物にもOCRをかけてみたい
  - 関連する現象
    - 理由説明の文型における、原因・理由形式の述語用法（〜ほどにぞ、cf. 大坪1982）
    - 以下のようなナレバが、現代語では容認されにくいことについて（cf. 高山2021）

    （31）

      a. サテアレハ。何-人ノ家ナレバ。ヤケ。ノコリテ。カク花ハ。ヒラキタソト。疑フタゾ。（三体詩素隠抄・巻8・31-7）
      b. してそなたはいかやうな人なれば、りふじんな事あそばすぞ（虎明本・禁野・40-虎明1642_02021,16640）

参考文献

青木博史（2022）「文相当句の名詞化」青木博史・岡﨑友子・小木曽智信（編）『コーパスによる日本語史研究 中古・中世編』ひつじ書房，pp.89-108．
青木伶子（1973）「接続詞および接続詞的語彙一覧」鈴木一彦・林巨樹（編）『品詞別日本文法講座6　接続詞・感動詞』明治書院，pp.209-253．
大木正義（1969）「「なれば」「なれど（も）」の構文論的機能について—発生期のそれ—」『国文学言語と文芸』63，pp.59-68．
大坪併治（1959）「トイフハ・トイハ・トハについて」『国語国文』28(2)．
大坪併治（1981）『平安時代における訓点語の文法』風間書房．
大坪併治（1982）「原因・理由を表はす文末のバナリについて」『訓点語と訓点資料』67，pp.123-138．
小田勝（2022）「『実例詳解古典文法総覧』補遺稿 第113回」

https://www.izumipb.co.jp/news/n39998.html.
春日政治（1942）『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究 研究篇』岩波書店.
北﨑勇帆（2022）「原因・理由と話者の判断」青木博史・小柳智一・吉田永弘（編）『日本語文法史研究6』ひつじ書房.
金水敏（2012）「理由の疑問詞疑問文とスコープ表示について」近代語学会（編）『近代語研究16』武蔵野書院，pp.349-367.
小林賢次（1996）『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房.
小林千草（2001）『中世文献の表現論的研究』武蔵野書院.
坂詰力治（1974）「名古屋市蓬左文庫蔵『仏性比丘六物図抄』について—解題並びに翻刻—」近代語学会（編）『近代語研究4』武蔵野書院，pp.171-250.
清水登（1995）「院政期から室町期までの接続表現について—ナラバ・タラバ・ナレバを中心として—」近代語研究会（編）『日本近代語研究2」ひつじ書房，pp.281-305.
鈴木博（1972）『周易抄の国語学的研究 研究篇』清文堂.
高橋淑郎（1999）「「自問自答形式の疑問表現」の性格」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』12，pp.55-76.
高山善行（2021）「連体「なり」の機能をどう捉えるか—「のだ」との比較を通して—」野田尚史・小田勝（編）『日本語の歴史的対照文法』和泉書院，pp.69-85.
竹村明日香・金水敏（2014）「中世日本語資料の疑問文—疑問詞疑問文と文末助詞との相関—」『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究 研究報告書（1）』国立国語研究所.
田中志瑞子（2007）「伝三条西実隆筆『毛詩国風篇聞書』について」『訓点語と訓点資料』118，pp.43-119.
田中志瑞子（2008）「『毛詩聴塵』の成立—『聞書』の利用を通じて—」『訓点語と訓点資料』120，pp.49-59.
築島裕（1963）『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会.
辻本桜介（2017）「文相当句を受けるトナリについて—中古語を中心として—」『ことばとくらし』29，pp.3-19.
中野遥（2019）「キリシタン版『日葡辞書』の「id est」について」『訓点語と訓点資料』143，pp.58-41.
藤田保幸（2000）『国語引用構文の研究』和泉書院.
三宅知宏（2017）「日本語の発見構文」天野みどり・早瀬尚子（編）『構文の意味と拡がり』くろしお出版，pp.65-78.
矢毛達之（1999）「中世前期における「文相当句＋ナレバ・ナレド（モ）」形式」『語文研究』88，pp.32-44.
山本佐和子（2019）「嵩山房刊「唐詩選」関連書籍群における注釈表現の諸相」国語語彙史研究会（編）『国語語彙史の研究38』和泉書院，pp.185-204.
山本佐和子（2021）「中世室町期の注釈書における「～トナリ」の用法」筑紫日本語研究会（編）『筑紫日本語論叢III—日本語の構造と変化—』風間書房，pp.107-133.
湯澤幸吉郎（1929）『室町時代言語の研究』大岡山書店.
湯澤幸吉郎（1936）『徳川時代言語の研究 上方編』刀江書院.
湯澤幸吉郎（1957）『増訂 江戸言葉の研究』明治書院.
Rizzi, Luigi. 2001. On the Position “Int(errogative)” in the Left Periphery of the Clause. Guglielmo Cinque and Giampaolo Salvi (eds.).
Current Studies in Italian Syntax. pp.287-296. Brill.

付記：本発表は、「抄物コーパス」の構築とコーパスを応用した日本語史研究」「意志・推量形式を中心とした日本語文構造の変化の研究」の成果の一部です。